

令和5年度厚生労働行政推進調査事業費補助金（肝炎等克服政策研究事業）

「多様な病態に対応可能な肝疾患のトータルケアに資する人材育成及びその活動の質の向上等に関する研究」 分担研究報告書

行動科学に基づいた肝炎医療コーディネーターの養成プログラム開発に関する研究

研究分担者：平井 啓 国立大学法人大阪大学 大学院人間科学研究科 准教授

研究要旨：本研究では、肝炎医療コーディネーターと肝炎陽性者・患者のコミュニケーション場面におけるすれ違いの事例を作成し、そのすれ違いの原因となるバイアスとフレーミング効果について解説を行った。事例1では、コーディネーターが合理性に基づいた発言をしているのに対し、患者は正常性バイアスや現在バイアス、現状維持バイアスに影響されていることが示された。事例2では、コーディネーターが損失フレームを使った説明をしていることが、患者の損失フレームでの認知を促進し、受療に対する動機づけを下げってしまう可能性が示された。

本研究で開発された研修コンテンツは、肝炎医療コーディネーターが患者とのコミュニケーションにおいて、患者の意思決定に影響するバイアスやフレーミング効果を理解し、より効果的なコミュニケーションを取るための一助となることが期待される。今後は、本研修コンテンツの効果検証や内容の充実化、さらには肝炎医療コーディネーターの活動が患者の受療行動や治療アドヒアランスに与える影響についての検討が求められる。本研究の成果が、肝炎医療コーディネーターの活動の質の向上につながり、ひいては肝疾患患者のトータルケアの向上に寄与することを期待する。

A. 研究目的

多様な病態に対応可能な肝疾患のトータルケアに資する人材育成及びその活動の質の向上等が求められている。昨年度までの研究では、肝炎医療コーディネーターに求められるスキル・能力は4つに分類されることを明らかにした。

第一に、知識である。医療に関する基礎的な知識はもちろん、医療事務に関する知識、法律・制度についての知識、遺伝子や難病治療・治験など医療周辺領域に関

する専門的知識など、幅広い知識が求められる。肝炎コーディネーターにおいては、従来の専門知識だけでなく、地域特性や医療従事者・患者の集団特性や個人特性についての知識を有していることも求められる。

第二に、コミュニケーション能力である。コーディネーターのために必要となる基礎能力であり、発展的に伸長が求められる。行動科学から考えられるテクニックを応用することもここに類する。また、

社会変容に伴うコミュニケーションのあり方への対応も必須である。

第三に、情報収集能力が挙げられる。新たな知見だけでなく、対峙した個人特有の個性や社会環境に関する情報を積極的に収集し、整理する能力が必要である。

第四に、多文化への理解である。国内外の情報を収集することはもちろん、法律や福祉などの異なる分野との協働が不可欠である職務には柔軟な理解力が求められる。

肝炎医療コーディネーターのさらなるスキルアップのためには、肝炎医療コーディネーターが、地域ごとの特性や職種間の異なる動機づけや認識を理解し、患者、家族、さらに多職種それぞれが「異なる景色」を見ていることを理解し、具体的にどのような景色を見ているかを明らかにするようなインタビュースキルを獲得することが必要である。そこで本研究では、「『異なる景色』を見ていることを理解する」ことを目的とした研修コンテンツを開発する。

B. 研究方法

分担研究者が行った行動経済学に関する過去の講演・研修スライドを参考に、上記目的に合致したストーリーを作成する。

ストーリーは、肝炎医療コーディネーターと肝炎陽性者・患者のコミュニケーション場面においてすれ違いが生じている場面を2事例作成する。シナリオには、限定合理性、損失回避、現在バイアス、正常性バイアス、現状維持バイアスに基づく発言を含むようにする。また、両者のコミュニケーションを改善させる方法としてフレーミング効果の解説を行い、その

応用例を前述の2場面のやり取りについて解説を加える。

C. 研究結果

1) すれ違いの場面の事例作成

以下のような2つの事例を作成した。

<事例1>

【患者背景】

42歳、女性、フリーランスのグラフィックデザイナー。2年前に社内の健康診断で肝機能の数値が高いことが指摘されたが、仕事が忙しく、その後のフォローアップを怠っていた。肝臓の疾患に対する知識が乏しく、症状がないため重要性を感じていない。ストレスが多い生活のため、アルコール消費量が多い。

【コミュニケーション場面】

コーディネーター 最近、体の調子はいかがですか？以前指摘された肝機能の件、引き続き注意していただきたいのですが。

患者 特に変わりないですね。仕事が忙しくて、あまり気にしていません。

コーディネーター 実は、定期的な検査をお勧めしたいんです。肝機能の数値が高いと、何か問題が潜んでいる可能性がありますから。

患者 そうなんですか？でも、今のところ具体的な不調はないんです。検査って結構手間がかかるし……。

コーディネーター お忙しい中恐縮ですが、検査を受けていただくことで、もし問題があれば早期に対処できるんです。予防は大切ですよ。

患者 わかってはいるんですけど、今、仕事が山積みで……。もう少し落ち着いたら考えます。

コーディネーター ～心の声～仕事の忙しさに追われていると、健康管理が後回しになってしまうもの。しかし、放っておくと重大な状態になりかねない。どう説

得したら……？

<事例2>

【患者背景】

AST 72 IU/L、ALT 85 IU/L、HCV RNA 6.2 log IU/ml

54歳、男性、自営業者。趣味で週末に釣りを楽しむが、仕事のストレスが多く、不規則な食生活と睡眠不足が続いている。5年前にC型肝炎の診断を受け、抗ウイルス療法を開始したが、副作用と忙しさのために治療を中断。最近、肝機能の悪化が見られ、再び治療を勧められているが、前回の経験から治療再開に躊躇している。

【コミュニケーション場面】

コーディネーター 前回の治療は中断されたと聞いていますが、肝機能のさらなる悪化を避けるためにも、治療の再開を強くお勧めします。

患者 正直、前回の治療でかなり辛い思いをしたんです。副作用がひどくて、仕事にも支障が出ました。今回も同じことになったらどうしようかと思って…

コーディネーター 前回の治療での苦労は理解しています。しかし、治療をしないことで肝臓の状態が悪化し、最終的には肝硬変や肝がんへと進行するリスクが高まります。そのような状況になれば、もっと大きな苦痛や損失が待っています。

患者 それはわかってるんですけど、また同じ苦しみを味わうのが怖いんです。治療を始めて、また仕事が手につかなくなったらどうしよう…

コーディネーター 治療の副作用は確かに心配ですが、現在は以前よりも副作用が少ない治療法もあります。一緒に副作用を最小限に抑えつつ、治療を続けられる方法を考えましょう。また、治療による短期的な苦痛よりも、長期的な健康を守ることが最も重要です。

患者 長期的なことを考えればその通り

なんでしょけど、今の生活にまた大きな負担が加わるのが嫌なんです。前回のよう状況にならない保証があれば…

コーディネーター 完全な保証は難しいですが、定期的なフォローアップや副作用への対処方法を事前に計画することで、治療をよりスムーズに進めることができます。～心の声～何か治療に前向きになるきっかけがあればいいんだけど…

2) バイアスとフレーミング効果の解説

次に、患者とコーディネーターのすれ違いを解消するためには、フレーミング効果の利用を解説した。フレーミング効果とは、同じ現象のポジティブな側面（ポジティブ／利得フレーム）とネガティブな側面（ネガティブ／損失フレーム）のどちらかに焦点を当てるかで意思決定が変化すること（例：利得フレーム「この治療を受けると90%の確率で治ります」、損失フレーム「この治療を受けないと10%の確率で病気が悪化します」）である。事例2においては、コーディネーターの「そのような状況になれば、もっと大きな苦痛や損失が待っています。」「定期的なフォローアップや副作用への対処方法を事前に計画すれば、」という発言が損失フレームを使った説明として解説された。一方で患者の「前回の治療でかなり辛い思いをしたんです。副作用がひどくて、仕事にも支障が出ました」と「また同じ苦しみを味わうのが怖いんです。治療を始めて、また仕事が手につかなくなったらどうしよう…」「今の生活にまた大きな負担が加わるのが嫌なんです」という発言は、患者の損失フレームを使った認知の結果であると解説された。この事例から、コーディネーターは損失フレームを使いがちであり、患者の損失フレームでの認知を促進してしまい、受療に対する動機づけを下げて

しまうことを理解することができ、そうならないように利得フレームを用いた説明の重要性を理解することができる。

D. 考察

本研究では、肝炎医療コーディネーターと肝炎陽性者・患者のコミュニケーション場面におけるすれ違いの事例を作成し、そのすれ違いの原因となるバイアスとフレーミング効果について解説を行った。

事例1では、コーディネーターが合理性に基づいた発言をしているのに対し、患者は正常性バイアスや現在バイアス、現状維持バイアスに影響されていることが示された。このことから、肝炎医療コーディネーターは、患者の意思決定において様々なバイアスが影響していることを理解し、それらを考慮したコミュニケーションを取ることの重要性が示唆された。

事例2では、コーディネーターが損失フレームを使った説明をしていることが、患者の損失フレームでの認知を促進し、受療に対する動機づけを下げってしまう可能性が示された。このことから、肝炎医療コーディネーターは、患者とのコミュニケーションにおいて利得フレームを用いた説明を行うことの重要性が示唆された。

本研究で開発された研修コンテンツは、肝炎医療コーディネーターが患者とのコミュニケーションにおいて、患者の意思決定に影響するバイアスやフレーミング効果を理解し、より効果的なコミュニケーションを取るための一助となることが期待される。

今後は、本研修コンテンツを実際の肝炎医療コーディネーターに対して実施し、その効果を検証していくことが必要である。また、本研究で取り上げたバイアスやフレーミング効果以外にも、患者とのコ

ミュニケーションに影響を与える要因があると考えられるため、それらについても検討を行い、研修コンテンツの内容をさらに充実させていくことが求められる。

さらに、肝炎医療コーディネーターと患者とのコミュニケーションの改善は、患者の受療行動や治療アドヒアランスの向上につながることを期待される。そのため、本研修コンテンツを受講した肝炎医療コーディネーターが、実際の患者とのコミュニケーションにおいてどのような変化が見られるのか、また、それが患者の受療行動や治療アドヒアランスにどのような影響を与えるのかについても検討していくことが重要である。

E. 結論

本研究では、肝炎医療コーディネーターと肝炎陽性者・患者のコミュニケーション場面におけるすれ違いの事例を作成し、そのすれ違いの原因となるバイアスとフレーミング効果について解説を行った。その結果、肝炎医療コーディネーターは、患者の意思決定において様々なバイアスが影響していることを理解し、それらを考慮したコミュニケーションを取ることの重要性が示唆された。また、患者とのコミュニケーションにおいて利得フレームを用いた説明を行うことの重要性も示唆された。

本研究で開発された研修コンテンツは、肝炎医療コーディネーターが患者とのコミュニケーションにおいて、より効果的なコミュニケーションを取るための一助となることが期待される。今後は、本研修コンテンツの効果検証や内容の充実化、さらには肝炎医療コーディネーターの活動が患者の受療行動や治療アドヒアランスに与える影響についての検討が求められる。

本研究の成果が、肝炎医療コーディネーターの活動の質の向上につながり、ひいては肝疾患患者のトータルケアの向上に寄与することを期待する。

F. 研究発表

1. 発表論文

1. Hirai, K., et al. (2023). Impact of Cognitive Function-Focused Mental Health Promotion Campaign for Psychiatric Help-Seeking Behavior in Japanese University Students. *Int J Ment Health Psychiatry*, 9(2).

2. 平井 啓・山村麻予・鈴木那納実・小川朝生. (2023). 医療従事者に対する意思決定支援研修プログラムの効果検証. *Palliative Care Research*. 18(3), 183-191

2. 学会発表

1. 平井 啓・田辺和奏・岡浩一朗・佐藤洋子・中谷英仁・佐々木敏・水野篤・山本精一郎：生活習慣改善に対する「無関心層」に関する新たなセグメンテーションアルゴリズムの開発. 第30回日本行動医学会学術総会, 2023.12.2 文京区

2. 平井 啓・足立浩祥・山村麻予・中村菜々子・谷向仁・藤野遼平・工藤高：認知機能に焦点を当てたメンタルヘルス促進キャンペーンが大学生の精神科医療への援助要請行動に及ぼす影響. 日本健康心理学会第36回大会, 2023.12.2 横浜

3. 大津真弓・白浜若菜・高橋みどり・金子茉央・平井 啓・小川朝生・立石清一郎・高橋 都・桜井なおみ：両立支援を必要としているがん患者に必要な「社内ピアサポーター養成事業」. 第96回日本産業衛生学会, 2023.05.11 宇都宮

G. 知的所有権の取得状況

なし

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし